

住まいにおける宗教的空間に関する研究

－ 北タイのS村・T村を事例として －



AK11110 御園 明里

Keywords

宗教観念 祭壇
宗教実践 住まい

1. はじめに

1.1 研究背景と目的

近年の日本では、人々の宗教に対する認識は人によって様々である。それは一人ひとり見ているものや感じるものが異なり、各々が独自の世界観を持つようになった時代のあらわれといえよう。

これに対して東南アジア諸国には、共通の宗教を信仰し、それらに密接に関連した暮らしを今も続けている集団が多く存在する。そこでは人々は共通の世界観に基づき独自の社会と文化を形成している。

居住空間と宗教的観念の関係について、例えば人類学者の吉田禎吾(1984)や鏡味治也(1987)が、人々の世界観は居住空間や村の構成に表れることを述べている。しかし彼らを含めて多くの先行研究では、住居に関する詳細な分析を合わせて宗教観念を考察していない。住居を建築計画学的に詳細に理解し、それを踏まえて宗教観念を考える余地は多分にある。

本研究では、東南アジアの村で人々の居住空間・形態および宗教的空間等に着目する。人々の宗教的世界観を明らかにするとともに、それが住まいの特徴と人々の日常行動にいかに関係しているかを考察する。

なお本論において、宗教的空間とは、居住空間内の祭壇およびその祭壇がおかれている空間で、宗教的实践が見られる空間と定義する。

1.2 分析の視点

本研究では異文化の宗教的観念を扱うことになる。宗教的観念は目で見る事ができないが、人々はそれを儀礼などの行為、祭壇などの物質で表現する。本研究では、これら目に見える形で宗教的観念を表象するものに着目して分析を行う。

1.3 研究方法

宗教と密接に関わる暮らしをする人々の村を対象地とし、フィールドワークを行う。本研究では、北タイのS村およびT村の2村で、以下の期間フィールドワークを行った。

S村：2014年9月15日～2014年9月21日

T村：2014年9月22日～2014年10月1日

(1) 実測調査

実測により、各世帯の外構図、住居の平面図、断面図(T村の8軒のみ)を生活物品なども含めて作成する。

(2) インタビュー調査

各世帯の住民に対し、調査前に作成したインタビューシートに基づいて、家族構成、一日の行動、居住形態などの基本情報の他、祭壇の位置、祭壇で行う儀礼、その他実際に行った儀礼等について聞き取りを行った。

またその他のインタビュー調査として、T村では、村の住居を建設する大工・宗教的役職者・現役農家の人々に対して、宗教儀礼に関するインタビューを各々行った。

2. 調査地概要

S村、T村ともに、宗教は上座部仏教と精霊崇拝・祖先崇拝を行っている。この精霊崇拝・祖先崇拝(アニミズム)は両村で異なる。

2.1 S村の概要

S村はチェンライ市街から約48km北の、ミャンマーとの国境近くに位置する(図1)。コン・ムアンとタイ・ヤイが住んでいて、人口は約900人、住居は205軒ある。その内タイ・ヤイの住居は約40軒であり、村のほとんどをコン・ムアンの世帯が占めている。

2.2 T村の概要

チェンマイ市街から南へ約30kmの、ピン川の支流カーン川沿いに位置する(図1)。村人のほとんどはタイ・クーンである。タイ・ルーの方言に似たタイ・クーン語を話す。

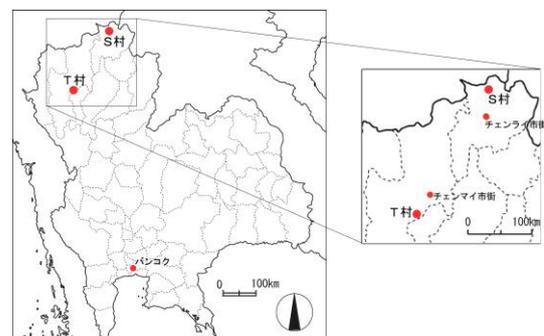


図1 S村・T村の位置

3. 住まい

3.1 広間と寝室

広間は、住居内で比較的広い居室であり、日常でくつろぐ場所の一つとして利用されている。また来客時は客人を通す場所としても使われる。客人が入れるのは広間までであって、これより奥の居室へは入らない。また広間は、儀礼の場としても利用される。儀礼時、広間には親戚や多くの村人が集まる。広間は住居内でもパブリックな要素を含んだ居室といえよう。

寝室は世帯により1つないしは2つあった。この居室は壁で完全に仕切られた個室空間となっていた。寝室の入り口にカギをかけていた世帯も多く、寝室内部を見るには、家人の許可が必要であった。寝室は家人にとって重要なプライベート空間である。

3.2 祭壇

両村の住まいには、以下の祭壇や祠が設けられていた。

(1) ヒンプラ

主に仏像などが置かれた仏教の祭壇である。ヒンプラの形式には様々なものが見られた。主なものとして、壁の高い位置に板を取り付けた形式や、既成家具の棚の上を用いた形式などが見られた(写真1)。



写真1 ヒンプラの一例

(2) チャオティー

土地の所有者とされる存在を祀るアニミズムの祠である。チャオティーの形式にも様々なものが見られた。市場で販売されている既製品の祠(写真2左)、小さな住居型の祠、木の板を棒で支えたのみの簡易な祠(写真2右)などであった。両村とも、チャオティーの上に置かれていた物品は世帯により様々であった。主にみられたのは造花、人形、線香、ロウソク、米や水であった。人形は仏や僧侶、女神、像、馬などがあつた。T村には何も置かれていないチャオティーもあつた。



写真2 チャオティーの一例

(3) テーワダー

テーワダーとは、住居内の寝室に設置されているアニミズムの祭壇、およびそこに祀られる守り神のことである。T村ではテーワダーは全世帯で設けられていたが、S村では所有する世帯と所有しない世帯があつた。目視

確認できたテーワダーの形式は全て、壁の高い位置に板を取り付けたものであつた。テーワダーの上に供えてある物品は極めて少なく、何も置かれていない世帯も見られた。

(4) 重要な柱

両村では、住居の柱のうち特定の1、2本が「魂の柱」あるいは「男の柱」などと呼ばれ、最も重要な柱とされていた。T村では、寝室部分にサオ・パヤー(男の柱)、サオ・ナーン(女の柱)と呼ばれる男女一対の柱が見られた。S村では寝室・広間部分にある2本の柱が、サオ・クワン(魂の柱)またはサオ・エック(重要な柱)、サオ・ナーン(女の柱)と呼ばれていた。サオ・パヤーやサオ・クワンは、住居の建設時に一番初めに建てる柱であり、建築儀礼ではこれに幸運を表す各種の供え物を結びつける。

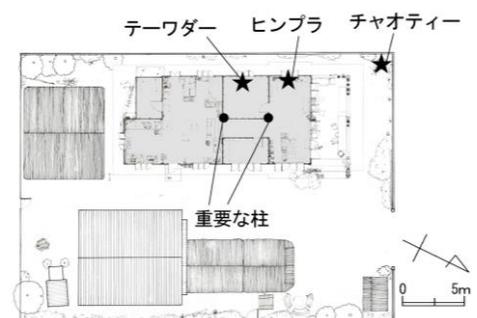


図2 住まいにある各祭壇の一例

4. 宗教実践の分析から見る世界観

4.1 祭壇における宗教実践

T村におけるチャオティー、ヒンプラ、テーワダーに対する宗教実践に注目する。ヒンプラに対しては、全世帯で毎日祈願が行われる。朝あるいは晩のみ行う世帯もあれば、朝晩共に行う世帯もあり、その頻度は世帯により様々であった。供えるものは世帯により異なるが、ご飯(お米)と水が主であった。チャオティーやテーワダーに対して祈願を行うのは、カオ・パンサーやソクランなどの仏教行事のときや、正月、結婚式などの儀礼時であった。また住居の新築改築時、村外の遠くへ出かけるとき、来客時など特別なときにも祈願を行っていた。

4.2 結婚式

T村の古い形式の結婚式の手順を以下に述べる。

『新郎にその親戚4人が付き添い、歩いて新婦の屋敷へ向かう。この時、新郎は刀を携える。これは悪霊から身を守るためである。新婦の屋敷前に着くと、まず屋敷の門の扉にスウェイ・ドゥーク(バナナの葉で作った三角錐状の容器で、中に花や線香等を入れる)を差す。そして屋敷内へ入り、土地の神に挨拶をする。次に住居の扉前に行き、同様に扉にスウェイ・ドゥークを差す。テーワダーに挨拶をする。そして住居内に入る・・・』

この手順から、屋外には悪霊という目に見えない脅威

が存在すると捉えられていることがわかる。また、門と扉の2カ所は単なる入口ではなく、領域の境界を示すと考えられる。屋敷内は、チャオティーに宿る土地神の領域であり、住居内がテーワダーの領域である。外界に対し、人の住まいは2段階の領域で組織されるのである(図3)。

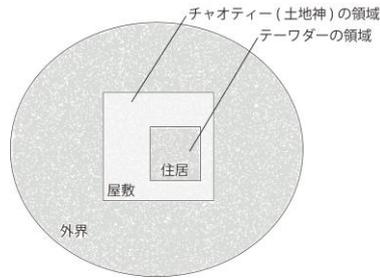


図3 住まいを取り巻く世界観

4.3 葬式

ここでは、両村における、葬式の観察にもとづいて述べる。両村とも葬式は住まいの中で行われる。屋敷に入りすぐの場所に棺が置かれ、そのわきには、ファン・ターンと呼ばれる死者のための小さな住居が置かれていた。ここではこのファン・ターンに注目する。

ファン・ターンとは、「死者の家」という意味である。聞き取りによると、この小さな住居には寝具、衣服、水、食事に必要な物、バイクや自転車など、死者に必要なあらゆるものが置かれる。火葬場に行くまでの葬式の最中、死者の霊はファン・ターンに宿るとされる。

ここから、人は死後その身体を失っても魂が残り、生前と同じような住居に宿るという観念が読み取れる。

4.4 その他の儀礼 パ・クロ

パ・クロとは、「悪いものを追い払う」という意味で、体調が悪い時や屋敷内の悪霊を追い払うために定期的に行われる。アチャーと呼ばれる村の長老が、屋敷の中に居る悪霊を人形に乗り移し外に追い出す。この儀礼から、結婚式からも読み取れたように、悪霊という存在が屋敷の外部にすることがわかる。

4.5 ターオ・タン・シー

T村では、ほとんどの世帯でターオ・タン・シーと呼ばれる祭壇がチャオティーの隣に設置されていた(写真3)。東西南北と真上の計5方向に対して板が設置される。板の上には供え物を置く。聞き取りによると、これに祀られるのは住まいよりさらに外部の八百万の神々である。ターオ・タン・シーは、特別な行事の前日に、この八百万の神々に対して行事を行うことを報告するために使われる。ここから、住まいの外あるいは村外にも、多数の神がいるという観念が読み取れる。



写真3 ターオ・タン・シー

5. 居住空間に表象される宗教観念

T村は、村人が慣習を深く重んじる傾向があり、その住居形式にも一定の統一性が見られた。一方、S村にはT村のような傾向は薄く、その住居形式は多様化していた。

ところでS村では、村で唯一の宗教指導者である男性の世帯を調査した。この男性の住居は古くからの慣習を踏襲した形式を現在も残しており、そのためS村の中でもっともスタンダードな住居形式と考えられる。

よって、T村においては、まず調査した全10世帯の住居から全体的な傾向や特徴を抽出する。これと人々の語りを合わせ分析を行う。S村においては、まず宗教指導者の住居を基準形式とし、その他の住居との違いを相対的に比較する。これと人々の語りを合わせ分析を行う。

5.1 T村の宗教的世界観

(1) ヒンプラの配置場所

T村において、ヒンプラが配置される居室は、全世帯とも広間である。その広間は、ほとんどの世帯で住居の北あるいは東に配置されていた。聞き取りによると、北・東、特に東は、太陽が昇る方角のため神聖な方角と捉えられている。広間は、儀礼を行う場としても使われるパブリックな居室である。ヒンプラは、住居内において最も神聖な方角にある広間に配置されるのである。

次に、ヒンプラに置く仏像の顔の向きに注目する。仏像を東向きに配置する世帯が1世帯、北向きが4世帯、西向きが4世帯であった。聞き取りによると、東向き・北向きに配置した世帯はその理由を「仏像の向きは東に向けると良いため」あるいは「僧侶から、仏像は北を向かせる方が良いと言われたため」と答えた。西向きに配置した世帯は「仏像の向きよりも、参拝時に自分が北、東を向くことが大切であるため、仏像は西に向ける」と答えた。仏像の向きに対する認識は世帯により異なるが、これらの説明から、仏像の向きが、ヒンプラの配置場所の決定に大きく関係すると考えられる。

ヒンプラの形式は、壁の高い位置に棚を取り付けたタイプと、既成の机を使用し、床上に配置するタイプの2つに分けられた。特に床上に配置するタイプのヒンプラは、スペースを無駄にしないため部屋の隅に置かれていたが、仏像の右手に壁が当たるよう配置される傾向が見られた。聞き取りでは、この配置の理由を「行事で僧侶が家に来て座るとき、僧侶の右側にヒンプラがないといけないため」また、「仏像の右で何かをするのは良くないため」と説明された。右は大切な方向と考えられており、これもヒンプラの配置場所の決定に関係すると考えられる。

(2) チャオティーの配置場所

チャオティーは、どの世帯でも屋敷の隅に配置されていた。その方角に注目すると、全世帯ともチャオティーが屋敷内の北あるいは東の方角に位置することがわかる。北・東は神聖とされる。チャオティーは、屋敷内において神聖な方角に配置されるのである。またほとんどの世帯でチャオティー正面を南あるいは西向きに配置する。この場合、人は参拝時に北あるいは東を向くことになる。チャオティーの配置においても、ヒンプラと同様に参拝

時の人の向きが重要視されると考えられる。チャオティーは祠のような建造物を持たなくても成立するため、チャオティー自体の向く方位は重要視されないのだろう。

(3) テーワダーの配置場所

テーワダーは全世帯において寝室内にある。2つある寝室のうち、テーワダーがあるのは東側に位置する方だった。また、それは住居の所有者が使用する寝室であった。

寝室内において、全世帯で、テーワダーはその主人が就寝する際の頭の近くに配置されている。就寝時の頭の向きも全世帯で東向きであった。就寝する際の頭の向きが、テーワダーの位置の決定に関係するのである。

寝室は重要なプライベート空間であることはすでに述べた。テーワダーは住居内でもっとも神聖でかつ世帯で重要な者のプライベート空間に配置されるのである。

(4) T村の重要な柱の配置場所

村の大工によると、サオ・パヤーは人が寝るときの頭の方、サオ・ナーンは人が寝るときの足の方に配置するのが理想だという。実際、サオ・パヤーは全世帯で主人の寝室であるナイ・ファン・ルアンにあり、就寝時の頭の近くに必ず配置されていた。対してサオ・ナーンの位置は世帯により異なった。理想の配置通りの住居もあれば、サオ・パヤーと隣に並んで位置する住居などがあった。サオ・ナーンの配置は多様化しているが、サオ・パヤーの配置は統一性が見られた。

5.2 S村の宗教的世界観

(1) ヒンプラの配置場所

S村の宗教指導者の住居では、ヒンプラは広間の隅にあり、そこに置かれる仏像は東向きに配置されている。聞き取りによると「ヒンプラはどこに置いてもよいが、仏像の顔が東に向くのがもっとも良い」とのことだった。

次にこの住居と他の住居を比較する。ヒンプラが配置される居室は、ほぼ全ての住居で広間である。またヒンプラに置く仏像の顔の向きは、すべて東向きだった。これは基準形式と一致する。よって仏像の向きが、広間内でヒンプラの配置場所の決定に大きく関係するといえる。

(2) チャオティーの配置場所

宗教指導者のチャオティーは屋敷内の東南の隅に配置されている。聞き取りによると、チャオティーは屋敷のどこに設置してもよいが、一番良いのは北東に置くことだという。

次にこの住居とその他の住居を比較する。屋敷内においてチャオティーは、全世帯で北または東の隅に配置されている。これは宗教指導者の語りと一致する。チャオティーは必ず神聖な方角を意識して配置されるといえる。

またチャオティーの配置について、宗教指導者は「屋敷の入り口に直行するように建ててはならない」とも語っていた。この決まりは全世帯に適用されていた。これは住まいの外に居る悪霊が侵入した場合、悪霊がチャオ

ティーに直行しないためと考えられる。

(3) テーワダーの配置場所

S村では、調査した全8世帯のうち5世帯でテーワダーが確認できた。まず、宗教指導者におけるテーワダーは、主人の寝室に配置されていた。就寝時の頭の向きは東であり、同じ方向にテーワダーが配置されている。

その他の住居では、就寝時の頭の方角は世帯により様々だったが、それ以外の条件は全5世帯で全て一致した。テーワダーは住居内でもっとも神聖でプライベートな居室に配置されること、また、その方角に関わらず、就寝する際の頭の向きがテーワダーの位置の決定に関係することがわかった。

(4) S村の重要な柱の配置場所

宗教指導者の住居ではサオ・クワンとサオ・ナーンの2本が重要な柱とされていた。2本は2つある寝室の間に位置している。サオ・クワンはその東側にあり、サオ・ナーンはこれに対し西側にあった。

宗教指導者の説明によると、サオ・クワンの場合は必ずサオ・ナーンを伴い、男女一對の柱とされる。サオ・クワンとサオ・ナーンの組み合わせが最も古いもので、サオ・エックは最近出てきたものだという。サオ・エックはそれ一本のみでも良いとされる。

これに対しその他の住居では、柱の名称や配置関係は多様化していた。しかし特定の柱が儀礼的に重要と認識されていること、柱に霊的なものが宿るなどの観念は残っていることがわかった。

6. まとめ

宗教実践の分析から、人々が神観念や東北崇拝などの観念を共通して持つことがわかった。そして宗教的空間の分析では、ヒンプラなどの祭壇や重要な柱は、ある宗教観念に基づいたルールをもって配置されることがわかった。よって、多様な宗教的観念が人々の日常行為や住居の空間構成に関係すると考えてよいだろう。

観念と行為と空間は、相互関係にあるといえる(図4)。例えば空間は、ある観念に基づいた行為が行われることによって特定の空間になる。いずれか1つが欠けてもこれは成り立たない。人々が生活する世界は、これらの相互関係によって組織されるのである。

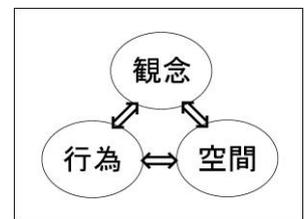


図4 観念と行為と空間の相互関係

参考文献

- 1) 「Ethnic Groups of Northern Southeast Asia」1998
- 2) Rhum, Michael R., "The Ancestral Lords" Northern Illinois Univ. Center 1994
- 3) 鏡味治也「宇宙と調和する住まい」『季刊民俗学』1987
- 4) 吉田禎吾「宗教人類学」東京大学出版会 1984